
無限暴走航路

0シュウト0

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限暴走航路

【Nコード】

N2763Z

【作者名】

0シュウト0

【あらすじ】

ユーリが出てこない無限航路の小説

主人公が転生系です。故にパロディ、ご都合大量

始章

惑星ロウズ…

夜、空に浮かぶボイドゲート。僕はそれを見上げていた。

いつか、大銀河を渡るOGドッグになる事を夢見て…

始章・ロウズ編

ロウズ周辺宙域

「ちっ…早打ち男は嫌われるよ！」

一隻の輸送船を改造した艦、デイジーリップを操る女性が叫ぶ

それを追うように三隻の警備船、レベッカ級が追いかけてレーザーを撃つ。

そのうち一発が翼のように広がった部分に被弾する

「ッ…やべえええ！」

爆発し、その余波でロウズへと落下していく。

「…え」

その落下していく先には…銀髪の少年がいた。

1章 ロウズ編

…少年の目の前には巨大な船が落ちている。

轟音と共に落下してきたそれは少年の脇を通過してその巨体を地に落としていた。

「いたたた…」

船から這い出てくる女性

それに少年は駆け寄った…が、少年は倒れてしまった。

「え！ちよつとアンタ！」

女性はその少年を抱き起こす。

そしてショートする船内へと運んでいったのだった

少年 side

「知らない天井だ…」

目 覚 める俺

いやふざけてる場合じゃないな。

無限航路やっていたら突然画面が光り輝いて、気がついたらベッドの上だった。

つかめっちゃ暗いのはなんでなん？

「気がついたかい？」

声のほうを見るとトス力さんがいた。…ここは叫ぶか

「打ち上げさん！？」

「いや、微妙に違う…いや合ってるのか？」

俺の一言で首を傾げる

つかアレか？ゲームの中に放り込まれたとかか？

デジモンワールド的な！？

…もうこのネタわかるのいないか…

side out

??? side

「エラー！エラー！」

「カンソクシャニイジヨウアリ」

「コチラカラノカイニユウケツケズ」

「ウワガキモフカ」

「イレギュラー！イレギュラー！」

「ツイセキシヤトウニユウフカノウ」

side out 少年 side

さて、どつか騒がしいみたいだが…

まあ状況をまとめるとだ。

「確かに飛ぶだけはいけるねえ」

「大気圏離脱したらトトラスに向かいましょう。」

航行に支障が出ない部分からパーツ集めて船を直した。

被弾したところはバラし、気密を保つため穴をふさぎ、デイジーリ
ツプは推進装置とブリッジのみの形になった。

トスカさんは渋っていたが、ロウズで一生過ごす気ですかと聞いた
ら渋々了承してくれた。

てかまさか修理出来るとは驚いた。

頭の中にあつたユーリの記憶まじばねえ「さあて…いこうか！」

次の瞬間…意識を失った。

ま…た…か…よ…

side out

side in

「子坊。起きなよ」

身体が揺れ、意識が戻る。
するとどうだろう。

目の前に『売却済み』とかかれた。デ이지ーリップがあるではないか。

…確かデ이지ーリップってエキストラモードで0Gだった…

…そして気づくとトスカさんに肩に担がれていた。

「ちったあ輸送船を買う足しにはなるだろうさ。設計図買わないとねえ」

寂しそうにトスカさんは笑う。

…そして俺は

将来来るであろう。トスカ必死イベント回避を予期して内心ガッツポーズしていた。

んでトトラスの設計図屋

絶望するトスカを横目に二つの設計図を手にする俺

なんで絶望してるかというと、デ이지ーリップは解体費と売却費が同額だったからだ。

なんでも船を売却する場合、
売却費 - 解体費という数式が出るらしい。

本来はデিজリーリップはマイナス値になるところだったが、ドロイドのお情けで0になったのだ。

ちなみに俺は自前の200000Gでお買い物である。
周回プレイのままして、高額を所有していた

「夜も末だねえ」

といいつつカップ酒を飲む

…手持ちないのかと聞いたら宵越しの金はもたねえ！とか言われた。
カップ酒代は俺が出しました。さて、入手した設計図はアルク級と
ジュノー級である。

性能的には大差はない。大マゼランと比べれば微々たるものである。
ただしジュノー級のほうが貨物室一個分くらい配置しやすい。
ただし戦闘艦としてはアルク級が若干高いのである。

とりあえずアルク級を作るかな。

俺はトスカさんを残して軌道エレベーターに乗った
んで飛んで次の日

「しつかしよくまあこんな人材を集めたねえ。一通りいるじゃないか。」

「トトラスだけで半分ですがね。ロウズ以外の惑星なら集めるのはなんとかまりました。」

総人数150人を雇うことに成功した。

ロウズ宙域では宇宙に出れる人は決まっているため、数を集める事はできたのだ。

「しかもあんな大金持ってたなんてねえ、子坊を侮っていたよ」

「俺は…ゼロですよ。ゼロ」

某強化人間研究所の最初の男、もしくは反逆の人の名を名乗る。

「ゼロねえ…まるで偽名だねえ。相当やましいことがあるのかい？」

姐さんの眼が冷たい！

「さて、出発ですよ！とりあえず目指せ3000撃破！」

「…」

まだ冷たいよ…

ちなみに何故3000というとただ単にエルメラーダ級が欲しいだけである。

ロウズの時点でエルメラーダ級…ロマンです

まあネージリッドの最新鋭艦がいまの時点で入手可能かは知らない

けどね。

ゲームの中では確認済み。あれは面倒だったぜ。ストーリー無視
してずっとロウズで名声稼いでたからなあ。まあおかげであの眼抉
られるイベントでグランヘイムが自分の船の上のほうに止まるのが
わかった。

いいのか悪いのか…

そんな訳で空間通商管理局でランキングを確認できるため、おそら
くエルメラード級やバロンズイウス級が手に入る。高額でかさばっ
て使いづらিদらうけど、モジュールも手に入るしな。

「あ。トスカさん。副官お願いしてもいいですか？いくら雇えたとい
つてもトスカさんが一番信用できますし。」

「構わないよ。プーよりましだしね」

ちょ。それ別の人の台詞っ

ともかく、司令艦橋へとあがると職歴から信用できそうな連中…よ
うはその筋のリーダーや専門家が集まっていた

まあ俺が艦橋要員で集めたんだけどね！

「艦長、聞いていたより若いわね。」

シアンさん、女性、24歳

元アナウンサーなのでメインオペレーターをしてもらってる

「でもいいんじゃない？美形よ？」

航海長

ヒメさん、女性、24歳

シアンさんの同級生で航路地図会社の社長していたらしい。

「よろしく頼むぜ！艦長！」

砲雷班長

ジランさん。男、28歳

ロウズ警備船の砲雷士してたらしい

「艦橋での挨拶は済ませたツスよ」

リーダー管制長

マドさん、20歳、男性

ジランさん同様元ロウズ警備船員

「インフラトンインヴァイターも最高潮だったよ。」

機関長

レインさん、69歳

実はかつてデラコンダがまだ0Gドッグしてる時の機関長だったらしい。

…大物かも

でも艦橋要員じゃないのに何故いるし

「俺らはまだ仕事ないから挨拶に来たぜ。艦長」
整備長

タカギさん、男、30歳

元ロウズ警備船の整備士

「出航してからが仕事アルからね。」

シェフ

ワンさん、42歳

家族率いて参加の料亭の人

…つか心読んだ？

「ま。搬入作業も終わりですからもう出航しますよ。」

「了解。空間通商管理局に連絡いたします。」

船が動き出すためにその巨体を揺らす。

「よし、飛ベツ」

その一言を合図に俺たちは宇宙へと旅立った。

2章 ロウズ終幕編（前書き）

お初ですね。前話はいかがでしたか？

さて今回はいきなりオリジナル艦がでます。乞うご期待！

2章 ロウズ終幕編

ロウズ警備船船長 side

「『黒』 捕捉、砲雷士、目標標準！」

「今度こそ叩き落とすぞ！」

例え適うまいとて仕掛けざるを得ない。この職についた事を激しく後悔していた。

黒いアルク級を旗艦とした駆逐艦の艦隊がロウズ宙域に現れたのは2ヶ月前、最初は一隻だったが、今ではアルク級が二隻、ジュノー級が三隻と

増長されてしまっている。

しかし領主のデコランダには第一級最優先目標と言われているので見つけ次第攻撃せねばならない。

「くそっ！全弾回避された！」

「目標に熱量増大！攻撃来ます」

「総員退艦ー！」

やはり適わないか…

side out

ゼロ side

「よし、ナイス。砲雷班！」

「いつも通り原形は留めさせたぜ」

駆逐艦で精密射撃ってすげえわ。うちの砲雷班

原形留めさせたのはまた出てきてもらうためです。

これを宇宙港に持って行って売るんだが、売った中古品をまたロウズ警備船として買ってもらう。

んでまた奪うっていうループで生計立てている。

名声値ももらえるし。拿捕するのもうちくらいなのでおいしくいただいてます。ちなみにアルク級一番艦とジュノー級一番艦以外は無人で、輸送船扱いだ。

アルク級二番艦は盾も兼用するし。

ジュノー級の指揮はトスカさんではなくなんとトーロである。

バツショで雇った人間の中にトーロがいたのは驚いたね。

何故かは知らん。

けど初対面だからなんとも言えなかった。

履歴によれば輸送船団率いていたから一隻任せたトスカさんには副官として色々アドバイスもらわないとだしね。

「シアンさん、カウントは？」

「今のところ、2871隻ね。2ヶ月でこれは凄いいんじゃない？」

1日で50隻くらいやったときもあったからな。

「一旦トトラスにもどろーか。ジュノーにも入電。」

「アイサー。キャプテン」

「そろそろランキング見に行こうか。」

エルメラード級欲しいんだよねえ。

バロンズイウス級って性能良いけど拡張性割と良くないから、長距離航行に向いてなさそうだし。居住性も考えないとだしな。

「しかし完全に海賊っスね。」

「いいんじゃない？相手はデラコンダだけだし」

ま。問題はいつチエルシーが出てくるかなんだよね。
原作なら即イベント発生したのに…

もしかしたらチエルシー無しになってる？

「あ。ジュノー一番艦から入電。」

「ん？画面に出して、」

トーロの野郎：なんの用だろう？

『ういーッス』

「用件いえ。」

『つめてえな。俺とお前の仲だろ?』

「いやそんな仲になつた記憶ないし」

ランキング早く見に行きたいんだけど…

『まあいいや』

よくないわい

『ニユース見てみるよ。デラコンダ本人が直接ゲート張るらしいぜ』

まじすかい?

「にゃにゃ?…シアンさん?」

「はい、今確認しました。専用艦使つみたいでゲートに向かって今朝出航したようです。」

確か大出力レーザー積んでるんだっけ…

うは、面倒…

くトトラス宇宙港く

とりあえずランキング見に空間通商管理局いこうか。
積んでいた荷物を五隻の艦から卸す間、メンバーにはみんな、お暇を与えた。

首ではなく休暇だよん。

「しかしよ。ランキング見に行くのはいいがそうかんたんにあがるのか？」

「いや今まで簡単じゃなかったからね？」

トーロと二人でランキングを見に窓口に行く。

トスカさん？あの人は酒場いったよ。

「いらっしやいませ！ランキング順位の確認ですね」

「うす」

他に何しにここにくるのよ。

「お客様のランキングは…なんと20位です！」

「…まじかよ」

啞然とするトーロ

いや狙ってたからね？
んで初確認だからな…

「…えつとこちらがランキング報酬になります！」

なんか大量に設計図キター！

大半はモジュールだな

「…バロンズイウスに…未完成の謎の設計図う？」

見た目エルメラード級っぽいんだけど、若干形が違っているか…
「翼なくね？」

「は？」

「え？」

なにいつてんだこいつ、みたいな顔で俺の顔みるドロイドとトーロ。
なんか双胴艦みたいなシルエットではあるんだが、翼っぽいなし、
翼っぽいのがあった部分の甲板にLサイズのレーザー砲ついているん
だよ。さらにSサイズの砲がMサイズにランクアップしてる

つまりL×3、M×3の超攻撃空母になってんのよ。

「なんなのよ。これ」

もう聞くしかあるまい。

「これはネージリッドで開発されていましたが、断念された空母で
すね。単艦で戦艦と空母の役割を同時に行うためのものらしいです。

」

…要はエルメラードの前身的なのか？

「…うし。これ黒く染めて作る。」

「…2000級か…小マゼランでは敵なしだな。」

グランヘイムといい勝負できたらいいな。

ちなみにランキングみたらヴァランタインさんの名声値、一億突破してたね。さすがに原作とは違うか。

ちなみにロエングは22位、サマラさんは18位、グラスシュは55位だった。

その辺は原作とは違うのね「そういえば、俺らってどんな感じに見られてるんだ？」

と、トーロ

俺も気になるな

「ロウズ警備船やデラコンダを崇拜する方々からは海賊として、宇宙に出たい方からは義賊のように見られてますね。ロウズ宙域では指名手配されてますが他の宙域ではランキングにいきなり上位にめり込んできた猛者のように見られていると思います。」

流石ドロイド、一息でいうとは…

「海賊か…」

「船から降りたくなっただか？トーロ」

物資の運搬に関してはプロ並みのトーロが抜けたら痛いからやめてほしくないがな…

「いんや？他の宙域いっただら大した事にならないだろ？お前次第だけぞ。」

「ま。他の宙域では海賊狙いたいとこだ。」

流石に軍に睨まれたらヤバいつつの

「じゃ、トーロ好きにしていぜ。俺は空母作ってくる」

「おうよ」

俺はトーロと別れて造船所に向かった。

造船所ではアルク級やジュノー級、フランコ級が改修や製造されていた。

実はロウズ警備船が大量にやられたため、ロウズの法を無視したい反デラコンダの連中が宇宙に出まくっているからだ。とはいえゲートが閉鎖されているため、他の惑星間のみであるが…

…俺のせいかな？

まあいいや。

「いらつしゃいませー。」

「これ製造したいんだ。」

そういつてエルメラダ(?)級の設計図をみせた

「こちらは宇宙初の開発ですので名前のほづをつけてもらえますか？」

「やっぱり名前ないのか…」

エルメラダとつける訳には行かないからなあ…

…よし。

「ソロモン級双胴空母で！」

「了解ですー。」

もちろん亡霊とかいる某宇宙要塞から命名しました。ただ接近されたら弱いから早く本国いつてまともな軍用駆逐艦買わないとだな。

けどエルメツアならアーメスタ級だよなあ…

軍人にあつたら交渉してみるか。

そして俺はコンソールで船内のモジュールを配置していくのであった。

完成は明朝らしい。

足りない人材はドロイドいれないとな。

ちなみにドロイドってあれだ。オープニングムービーでコンソール叩いてたロボット。

人間の代わりにはなるけど、突発した能力ないからな。可能な限り人を雇いたい。

…それを終えたら寝よ

side out

翌日

S i d e i n

「
…」
「
…」
「
…」
「
…」

「お。やっぱりでけえな！」

「感想ありがとうトーロ。君は心の友だ」

トーロ以外無言ってどーよ。これ。

まあグランヘイムよりでかい艦の前で普通よりでしたが。

「…なんだいこれ？」

トスカさんがようやく口を開いた。

「ソロモン級双胴空母。宇宙で俺しか持っていない超大型艦。我らが旗艦にして、新しい家だ！」

そう。そこにあるのはエルメラダに酷似してるが、翼はなく、通常の戦艦を超える砲塔を標準装備した漆黒の空母。

「ちなみに、スポーツジムに自然ドーム。シップショップ、大型浴槽完備、食堂も一流ホテル越えの設備、医務室も病院並みだ。見ての通り空母なので格納庫や整備室もでっかいぜ」
ランキングでもらった。

「…う、うおおっ！」「…整備士、生活班、保安員を筆頭に歓声

が上がる。

ちなみに科学班はいないのよ。

何故なら乗船希望の科学者がロウズ宙域にいないから。

「艦橋もアイルレーゼンのものだ。管制室の機器も最高のものを用意した！」

「「わああ！」「」」

今度は全員から歓声があがる「しかし金が尽きそうだ！」

「……」

今度は冷めた……だと……！

「故に、いまのままロウズ警備船を襲っているは無意味だ！これより我が艦隊はゲートの敵を蹴散らし、エルメツァ本国を目指す！俺についてくるものは続け、去るものは去っても構わない。ただし一言言わせてくれ。今までありがとう！」
そう言い終われば艦への入り口を開ける

「「わあああ！」「」」

「私はついていくよ。これからは正式にクルーさ。」
とトスカさん

「みんなはええな……」
とトーロ

この二人以外みんな我先にとソロモン級へと入っていった。

早い。早いよ。

「あ。トーロ、当面は保安局長についでくれ、アルク級とジュノー級は全て前衛で前に出すから無人にした。」

「いいぜ。艦長職は肩がこるしな…」

「じゃ私等もいくよ」

気づけば俺たち以外いないし。

うちのクルーまじばねえ…

それからそれから

各部署に人員が行き届くまで一時間かかり、ようやく出発した。最初の1日こそゴタゴタしたが、1日半かけてボイドゲート前までやってきた。

「艦長！敵旗艦から通信です。」「受けてやりな。」

「了解。」

デラコンダのやつナンのようだ？

『君がゼロ君だね？さあロウズに戻りたまえ。今なら刑も軽くして

やろつ。』

偉そうな…

俺。偉そうな傲慢なの嫌いなんだよね。

「砲雷班、威嚇で敵旗艦の大型砲に主砲3つ発射」

「オーケー！」

『なに！？』

ソロモン級からレーザーというべき3つの閃光が放たれる。

それはデラコンダの旗艦…

右側に大型砲をつけた超アンチシンメトリーな艦の大型砲に直撃し、爆散させた。

「帰りましたえ？帰るべきはそっちだろ？てか避けるよ。そのための威嚇なんだからな」

堂々と通信で言ってるんだから回避行動取れよ…

『ちっ…ならば全勢力で相手してやろつ。』

「艦長？レーダーに感あり、ボイドゲートのからレベッカ級がくるッスよ。10機…いや20機！さらにジャンゴ級10機」

…よし。ならば戦争だ！

「アルク、ジュノーを前方へ出せ！砲雷班は敵射程外から迎撃！」

「了解！」

ソロモンからレーザーが何度も放たれる。

まあレベルカ級はアルク級の連装砲が直撃するだけで落ちるのでオーバーキルになる。

あとでわかった事だがソロモン級は対艦の数値がバロンズイウス並だった。

空母としちゃあり得んよ…。もはやチートだね。

「レベルカ級、八隻大破！ジャンゴ級二隻が消滅！」

レベルカ級はなんとか回避してかすったようだが、大破か…でも直撃したジャンゴ級は消滅って…

「…ごめんなさい」

「いやなに謝ってるんだい!？」

いやだって消滅だよ!？

凶悪すぎでしょ!うちの艦!「いや残骸すら残らないのは…」

「宇宙に出ているんだ。ダークマターになるくらいは承知してるだろうさ」

「ならいいすけど…」

そして相手の射程外から撃ってるため攻撃が来ない。

しかもソロモンはその凶悪な主砲と副砲を撃ちまくっているわけで…

「…敵旗艦以外逃亡を始めました。」

「…だろうね…」

艦橋にいる人の心の中が 一緒になった。

「敵艦隊に通達。ボイドゲート封鎖を解くのであれば攻撃をしない。ただし依然として敵対するのであればダークマターになっていただ

く。」

「了解です。」

わざわざ追撃する必要ないしな。案の定旗艦以外は逃げていく。

残るはデラコンダただ一隻！

『小僧：貴様あああ！』

うは。テラ怒ってる（笑）

「まあ落ち着け。砲雷班、目標あのデコランダ」

「ブッ！り、りようかいっ」

「かんちょ…それは…」

「あつはははは！」

決まった…てか皆のツボにはまった。

『ぐぬぬぬ！このままでは済まさんぞ！』

「っ…通信、切れました。」

「敵…旗艦、接近！」

笑いが止まらない件（笑）

こらえながら仕事してるよ皆

「さてまじめになろう。砲雷班、敵旗艦前方に集中砲火！アルク級やジュノー級からも撃たせろ！」

「おう！」

デラコンダの船は最大戦速でなのか、かなりのスピードで迫ってくる

る。

流石に特攻はまずいぞ？

「主砲、副砲着弾、敵艦通常砲門開口！熱量増大！」

「させねえよ！今までこき使われた恨みだ！」

「兄貴やるツス！」

「おうよ！艦長、バーストリミッターの解除を！」

そついやジランとマドは元口ウズ警備船だもんな。恨みもあるのか。

「よし。許可する。そのかわりのこの一斉射撃で仕留めろ。」

「おうよ！」

恐らく回避軌道をとっていない相手だ。撃沈するだろう。

「バーストリミッター解除！全砲塔標準！はっしやあああ！」

ソロモンから放たれるレーザー。

それはデラコンダの船に着弾し、大爆発を起こした。

「インフラトン反応拡散…撃沈です！」

「おっしやあああ！これが俺の力だあああ！」

「兄貴流石ツス！」

ものすごく喜んでるジランとマド

だがジラン、それはお前の力じゃなく、俺のソロモンの力だ！

「さて、邪魔者は消えたねえ。ゲートに突っ込むとするかい！」

「いよいよロウズから出るんだな！」

そして期待にテンションあがる艦橋。他の部署も同じだろうな。

…だがしかし。

「いやまずは目の前のデブリ回収するよ。」

「え…」

「空気読んでよ艦長…」

俺の一言で落胆する皆

いや金になるし。なにより…

「マド、ゲート前で浮いてるのな〜んだ？」

「なにつてデラコンダの…あ！」

気づいたらしい。

そう、ゲート前で戦闘したためデブリを回収して撤去しないと通れないのだ。

死しても邪魔者か、デラコンダさんよ…

「わかったら早速作業にかかるよ。最低人数だけ残してあとはジュノー級とアルク級にいくよ。ソロモンでそのままいったら傷ついちゃう」

「…ういゝす…」

そんな訳で足止め食らうのだった。

2章 ロウズ終幕編（後書き）

オリジナル艦ことソロモン級双胴空母が出ました。

流石にエルメラードを使うわけにはいかなかったので（苦笑）

性能としては原作のランキング報酬のグランヘイム並みですね。

いきなりの妄想暴走です。

次回はさらなる暴走もあるかも…

3章 ラッツィオ編1（前書き）

ついに来ました。ラッツィオ編！

さてさてこれからどうなるか…乞うご期待！

3章 ラッツイオ編1

ゼロside in

「…げ。」

デラコンダ艦隊残骸をジャンク品として回収に2日かかり…いや普通に考えたら早いんだが…ゲートに突入したんだが…

「…えつとシルエット照合完了ッス。スカーバレル海賊団のガラーナ級2、ゼラーナ級1、オールドーネ級1、ジャンゴ級8ッス。全艦こちらに回航中、熱量増大ッスね」

いきなりスカーバレル海賊に遭遇…しかもこっちに尻向けた状態である。

「ついでにその先にボイエン級4隻、サウザン級1隻、アリアストア級4隻ッス」

「カラーリングからエルメッツァ本国の正規軍だねえ。この辺じゃ珍しいよ。」

…こんなイベントなかったと思うんだけどさ

「ま、軍人に恩売るのも一興か、ジラン、スカーバレルにぶっ放せ！」

「オーライ！」

こっちにくる前に撃ち込む。

ソロモンのレーザーが火を吹く！

…なんか違うか？

「あ！オルドーネ級が避けたッス。完全回避ッス」

「回航中のあの状態でか！？」

ものすごい驚いてるジラン。

そりゃ驚くよな。

ロウズではほぼ百発百中だったんだから

「でもオルドーネ級以外は全てレーザーの余波で行動不能ッス」

「敵艦から通信。」

通信用の画面にオールバックの男が映る。

『てめえ…こつちの邪魔しやがって…次は容赦しねえぞ！』

「次があるとしてもお「通信切断されました」

ちよっ！遮られた！

「しかも足早に離脱されたッス」

「にがしたああああ！？」

驚きすぎです。砲雷班

「今度はサウザーン級から入電です。」

今度は若干体格がいい軍人が写った

『こちらエルメツツア中央政府軍、オムス・ウェル中佐だ。援護感

謝する。』

ふむ。それなりの態度で対応してやるか

「いえ。それよりも何故このような地点で戦闘を？」

『うむ。我々はスカーバレル海賊団を警戒してパトロールしていたのだが、たまたま輸送船団を襲う連中を見つけてな。』

「なるほど。」

『うむ。今回の礼をしたい。後日ラッツィオ軍基地まで来てもらえるか？』

「構いませんよ。」

行っただけにアーメスタ交渉してやるか。

『ではまた会おう。』

「エルメツツア艦隊、ボイエーン級を伴って離脱していきます。」

「艦長どうします？ここからならまずポポスで荷を降ろすことをお勧めしますよ？」

と航海長、

「ならそのように。ついでにトラクタービームで行動不能の連中も引っ張っていこう。スカーバレルの連中に刃向かったらタンホイザにぶち込むって入電入れといて」

「了解です。」ソロモン級で引っ張りながらアルク級とジュノー級

で後方から監視する。

無人艦だからできる芸当だよな

んでポポス

ポポスの宇宙港に入っすぐ、引いてきたスカーバレルの船を売った。

中の連中にはそのまま港で降ろした。

宇宙に放り出されるよりましだろう。

ついでにアルク級、ジュノー級、ソロモン級に積んでいたジャンク品も引き取ってもらった。

あとで精算してもらう。

そしてポポスにて3日間休暇を取った俺たちは再び銀河へと旅立った
「とりあえずラッツイオ軍基地にいくしかないよなあ……」

「いちお、最短航路を見つけてあるわ。ポポスからラッツイオ経由でいくルートね。一旦ラッツイオに寄航する事をお勧めするわ。」

流石はうちの航海長ヒメさん！そこに痺れる憧れ（ry

「そいやラッツイオに確かギルドあるんだっけ？」

「そついやあつたね。誰か雇いたいのかい？」

俺の質問に真っ先にトスカさんが答えてくれた。
確かトランプ隊がいたはずだが…

「そろそろ科学班と操舵士を雇いたいしさ。」

科学班は仕方ないとしても操舵士は欲しいな。重力下でバレルロー
ルさせるくらいの実力の持ち主いたらいいな…。

「寄航する度に募集はしてみてるけど、まだまだ欲しい人材はある
しね。優秀な人材ならいるに越したことはない」

「確かにねえ。」

そんなこんなでスカーバレル海賊団を撃破しつつラッツィオに寄航
する。

今度はオールドーネ級が捕獲できたけどこいつを解体処理するのに五
日かかるそうな。

つまりその間、ラッツィオで休暇である。

その間にトーロやトスカさんを引き連れてギルドにやってきた。

「…うわぁ。」

「袖がなげえな。」

なんか隅に子供いたし。

とりあえず窓口に行くのである。

「すみません。人材を雇いたいのですが…できれば傭兵とか科学者
とか操舵士とか…」

「傭兵と操舵士でしたら三番ブースにトランプ隊の方々がおります。」

トランプ隊 k t k r !
さっそくいつてみた。

「…ほほう。あなたが」「若いじゃないか。大丈夫なのかい?」

いかついおっさんとおばさん…いったら殺されそ。
ププロネンとガザンやね。

「ども。ゼロっていいます。是非あなた方を雇いたいんですよ。どうですかね?」

「ふむ…フェノメナ・ログを見せていただきたい。」

「おっけ。」

別に構わないのでログ…航海記録を見せる。

これは全ての航路、交戦記録が自動記録されている。
基本的にこれを目安にして品定めされるのだよ。

「…これはこれは」

「…半端ないな」

「で、乗ってくれる?」

ま、多分大丈夫だろ。

「あなたになら我々の命も預けられそうだ。私はププロネン、トランプ隊のリーダーをしています。」

「あたしはガザンだ。久々に腕がなるねえ！」

「お、交渉成立のようだねえ。」

「良かった良かった。じゃ俺はトランプ隊の方々を艦に案内するか
ら、二人はどする？」

「俺は酒場いつてくるぜ」
とトーロ

「お？なら飲み比べするかい？」
とトスカさん。

「おっけ。出航までには帰るんだよ。あと4日あるから大丈夫だろ
うけど」

二人を見送り、乗艦のため荷をまとめていったトランプ隊を待つ間
にギルドでさらなる人材発掘をした。

その結果、科学班数人とその筆頭の水ロムさん。操舵士のアールド
さん。

彼らを雇う事に成功した。彼らとトランプ隊を引き連れて宇宙港へ
とやってきた。

「ふむ…しかしどれが艦長のものでしょうか？」

ラッツィオの宇宙港には
サウザーン級やオールドーネ級（解体処理中）、フランコ級、ボイエ
ン級、アルク級があった。

「ま、オールドーネ級がそうだ。といっても過言じゃないけど」

そのまま1000級以下の船があるドッグから離れ、大型艦船ドッグに向かう。

…彼らの疑念の目線がキツイッス

つか大型艦船ドッグもうちのしか使っていないからアルク級やジュノ
ー級も一緒に入れてるけど。

「これが俺の旗艦にして君たちのこれからの家、ソロモン級双胴空
母さあ！」

「「「
…」」」

あれ？なんかデジャヴ

「…これはネージリンス…いやネージリッド系列の艦船ですね。空
母という事は艦載機も？我々はパイロットですのであれば活躍でき
ますが」

カラーリング変えてるのに見てわかるとか…プロネンさんパネエ！
「その通りネージリッドのです。いや艦載機は現在ないから、入手
できるまでは傭兵の皆さんには教官や訓練積んでもらう事になりそ
うかな。」

確かカルバライヤで入手できたっけ…

でもないよりマシ程度の性能しかないからな…

「ふむ…わかりました。」

「納得していただけて助かるよ。当面は保安局所属だから治安守っ

てね。」

「了解だ。あたしらは白兵もこなせるからね！」

「「おー！」」

歓声があがるトランプ隊

「操舵士のアールドさんとホロムさん方は艦橋いつて挨拶。その後研究室に案内するよ。さてここにだします端末がうちの乗員の証ですので無くさないように。」

そっついながらスマートフォンぽい端末を渡す。

実はこれ、スマートフォンとかにものすごく近いのに性能が隣の惑星ですらつながるほど高性能。

艦内では財布や身分証の役割もしてアプリも入っている。しかも艦内地図完備で改修の度に自動更新である。

マジパネエ…

4章 ラッツィオ編2

「ゼロ艦長、あんたまだ宇宙に飛び出してから半年も経ってないんだって？」

誰から聞いたし。

今、ソロモン艦隊はラッツィオ軍基地に向かっている。

…惑星の名前が基地で…

ついでに生活班に人が増えた。トーロの幼なじみのティータだ。お兄さんが軍人だが音信不通ということらしい。

聞くも涙、語るも涙の話があつたらしく、トスカさんが副官権限で仲間にしたらしい。

…まあワンさんとも人手不足なところあつたからな。

そして現在、俺はガザンさんとプロネンさんと共に艦内巡りをしている。プロネンさんにはリーダーとしての先輩でもあるので色々勉強になる。「そうだけど、やっぱり経験が少ない艦長じゃ不安かい？」

「ガハハッ！自治領一つぶした上にランキング上位のガキを不安に思うもんか。この宇宙じゃログがものをいう。自信を持つこつた。」

「ういっす、しかし自治領つぶしたのはまずかったですかね」

「いやいや、気に病むことはありませんまい」
ププロネンさんが小さく笑い、続ける

「風のウワサで、ヤツのことは私も聞いておりましたからな。多くのOGドッグはヤツのことを快く思っていないかったと思いますよ。」

「ならむしろいいことしたってところかな」

「そうゆうことですな」

豪快に笑う俺ら三人

その間に食堂についた。

トランプ隊の二人は初の食堂、俺はティータに会いにきたのだ。

「ういっすワンさん」

「アイヤー。艦長また来てくれたアルか？」

厨房から顔を出すワンさん

いまはクルーもそんなにいないようで暇なようだ。

「トランプ隊のお二人と来たよ。ところで新入りのティータとやらはいる？」

「いるアルよ。ティータさーん？シャチヨさんがおよびアルよー」

そういいながら厨房に戻るワンさん。

つかなんか色々混じってる！？

ププロネンさんやガザンさんも苦笑まじりだ。

「あ、あの始めましてっ」

今度は長髪の女の子が出てきた。

「あなたがティータさん？」

「はいっ」頷く。

イベント通りだとこの子の兄さん、死亡フラグ満載なんだよなあ…

「軍基地では一緒にオムスんどこいくよね？多分お兄さんのこと聞けるよ」

「お願いします！」

食いつきがいいことで…

「じゃ注文頼むよー。俺はラーメン。お二人はどうする？」

「では私は炒飯セットとやらを…ガザンはいかがします？」

「あたしも同じやつでいいよ。」

「はい。ではしばらくお待ちください！」

注文を受け、厨房へ走るティータさん。

ワンさんのは中華がメインである。洋や和も充実させたいところだな…

「オムス中佐ですか…実は彼とは一度砲火を交えたことがありますね。」

「え!？」

おいおい。まさか。この人、エルメツツアの中央政府軍に喧嘩うつたんじゃ…

「いや、まあ…最近ではありませんよ。少々やんちゃだった、若い頃の話です。」

「アンタの場合、やんちゃじゃすまない話だったけどね。」

「ふふ…さて、どうでしょうか?」

茶化すガザンさんとごまかすププロネンさん。

本当に仲がいいんだな。

「できたアルよー!」

厨房からワンさんの声がする。

そして俺たちの前に注文した料理が並んだ。

「ほほう。これはラツツイオでも滅多にお目にかかれないものですな。これは美味しい。」

一口食べて料理を誉める。

確かに美味しい。この腕の料理人がロウズに埋もれてたのは驚きだ。ワンさん曰わく物価が高すぎたらしい。

さて食堂で料理を堪能した後、俺は二人と別れて艦内を歩いた。目指すは格納庫の横にある整備庫。

その近くには科学ラボや解析室がある研究区画となっている。

このソロモン級、拡張性が原作のエルメラードの倍近くあった。

原作だと入れられないところがあったが、こちらだとかなり入る。

「おや？」

なにやら言い争いが聞こえる

「だっから！作るんだったら人型だろうがよ！作業用に転用できるぜ！」整備班長タカギさんと

「否！断じて否！やるのであればスピード重視である！戦闘機型にすべきだ！」

科学班長ホロムさんの叫びだわこれ…

うわ。面倒臭いぞこれ…

俺は反転して去った。

尚、宇宙艦はグラビトン・ウェルにより重力が発生している。そのため歩けるのだが、ソロモン級のようには2000m級の艦船には歩く歩道がある。

たまに空港とか駅にあるアレだ。

ちなみにあとで聞いた話だが、艦載機の開発をしていたそう。

俺は許可していない。

『ラッツィオ軍基地にまもなく到着致します。艦長は艦橋に起こしてください。繰り返します…』

「にゃ？」

もうラッツィオ軍基地についたのか。

面倒なんだよなあ。軍人に会うなんてさ…
仕方ないからいくけどね。
そんな訳で艦橋に向かうのだった。

s i d e o u t

s i d e i n

ラッツイオ軍基地

今回はトーロ、ティータ、トスカさんの三人を連れてきた。
守衛の人に一言いればオムス中佐のいる部屋に案内された。

「よく来てくれた。」

入ればオムスに迎えられた、

「改めて自己紹介しよう。エルメツツア連邦中央政府軍、第4方面
軍第122艦隊所属オムス・ウエル中佐だ。それとこちらは私の上
官のモルポタ・ヌーン大佐」

「…」

無言かよう

「そしてこちらは基地司令の…」

「テラー・ムンス、階級は中佐だ。」

こっちはまだいい人そうだなあ

「しかし通信でも思ったがまさか、君のような少年が艦長とは…」

「なにか問題でも？」

品定めするように見やがって…

「いや君のような新しい視点をもつものも必要なかもしれない。
君はこの宙域の状況をどう見るかね？この海賊がたむろし、したい
放題の状況を…」

「そりゃあ中央政府がだらしないんじゃないの？」
トーロがビシツと言うなあ。

「ま、本当のことだね」
頷く俺

「む、そういわれると返す言葉がないな…だが今は連邦全域が非常に不安定なため、軍も手が回らないのだよ、」

「んで？」

「うむ。君たちの腕を見込んで海賊討伐に協力して欲しいのだ。もちろんこちらで用意できる限りの報酬も用意する。」

「…」

美味すぎる話だな

「おいしい話だけど、軍の一員として扱われるのはしゃくだねえ。」

「こちらはそんなつもりはないのだが…」

よし…案は決まった。

「なら報酬はグロスター級とアーメスタ級の設計図、あと金ね。それと海賊のジャンクとかの入手も許可してほしい。」

…そして何故か静まる

…静まる？

「…ゼロ。あんたねえ」

トスカさんが呆れてる、

「君は度胸があるのだな…」

「むしろ当たり前かと。こちらはクルーの命を預かってる身です。ただ軍の露払いにつかわれる訳にはいきませんから。」

一息ついて、さらに続ける

「それと、ここにいるティータのお兄さんが軍人だそうで、音信不通らしいのです。なにかご存知ありませんか？」

「ふむ…そのお兄さんの名前と所属は？」

「所属はわかりません…けど名前はザッカスです。」

「ほう！？君はザッカス中尉の妹さんなのか！」
オムスの声変わったよ！？

「驚いたな…ザッカス中尉は今、スカーバレル海賊団に潜入している。奴らの基地に攻撃に向かうのだが、本拠地がわからなかったため、他の数人の部下共にスパイにいつてもらっていたのだ、しかし彼のおかげで本拠地も見つかったのだよ」

あれ？確かザッカスに会いに行くはずじゃ…

イベント飛んだ？

「それと報酬だが君たちに戦力の増強もして欲しいため、先にグロスター級を渡しておこう。空母と駆逐艦だけではなにかとキツいだろう。」

うちの空母はチートだけだな。
グロスター級は拡張性も高いし、ペイロードもあるから輸送戦艦として使えるな。

「奴らの本拠地は暗礁宙域の奥にあるらしい。暗礁宙域はレーダーの効果も半減するからな。隠れ場所として申し分ない。グロスター級をこれから作るとして完成まで1日はかかるだろう。出撃は2日後を予定するつもりだ。」

「構いません。では我々は失礼します。」
「うむ。よろしく頼む」

さて、軍基地から出た俺たちは一旦ソロモン級に戻った。

事情を説明したら艦橋メンバーと各班長は俺の判断を支持してくれた。

そしてジュノー級を売り払い、ソロモン級、アルク級を改装、グロスター級の造船を始めた。

ソロモン級以外は完全な無人艦にするため、CU…コントロールユニットを搭載。

ソロモン級にはそれ兼統合統括型AI機能付きのものをつけた。ついでに艦長室も導入。

書類仕事せにやなんのよ…

「うは…テラ面倒…」

新品の部屋の中にあるデスクの上には、大量の書類が…

つかこればかりは旧式なのな。え、改竄防止のため？マジすか。

「ま、やるしかないわな」

『頑張ってください！』

「おう！…え？」

…今声した？

「…疲れてるんかな」

『え？頑張らないんですか？』

…

でだ。

「…統合統括型AIさんなの？」

『はい。先ほど起動しましたので。まずは艦長にご挨拶を』

「おっけ。しかしいきなり初めての相手に声かけるのはやめところな？」

マジ幽霊かと…

『はい。』

「一応みんなに紹介の文章いれとくから。仲良くね。…名前はクォーツな」

端末をいじって搭乗員全員にメールを送る

確か石英の英名…だっけか？

『はい！ありがとうございます！』

「ん。いい返事だ。」

娘持った気分だね。

「さてと、時間も過ぎてしまったし、やりますか！」

『はい艦長！』

そして俺はクォーツの声援を背に書類と格闘を始めた。

4章 ラッツィオ編2（後書き）

今回登場しました統合統括型AIはQOLさんから許可をいただいております。

許可していただいて本当にありがとうございます！

5章 ラッツィオ編3

第三者視点

サウザーン級オムス搭乗艦

時刻になりサウザーン級の観測用レーダーには宇宙港付近にて待機する巨大空母：ソロモン級が率いる部隊を捉えていた。

「…では我々も出撃致します。」

「後武運を。」

通信越しに声を交わすオムスとテラー

テラーの脇にはモルポタもいた

「戦果を期待しておるよ。オムス中佐」

「はっ。」

オムス乗艦艦は他のサウザーン級やファイアン級、アリアストア級、アーメスタ級を率いてラッツィオ軍基地から出航していった。

そのままソロモン級艦隊の前面に出て、彼らを率いる形で暗礁宙域に突入していった。

side out

ゼロ side in

「…砲雷班、レーダー管制班、警戒厳に。」

「え？でも警備が手薄なルートを進む話だったんスよね？それならそんなに警戒する必要ないんじゃない？」

「そうだよな。それに軍艦も一緒なんだぜ？」

いつとくけど、軍艦よりうちのレーダーのほうが性能いいからね？

「それでもさ。宇宙じゃなにかあるかわからんよ？クー、グロスタ
ーを前面に、アルク級は左右へ移動」

『了解です。』

クオーツの愛称はクーになった。もともと短いのにさらに短くなっ
たぜ

「確かに、彼らはスパイからもたらされた情報を信じている。艦長
の言つとおり警戒しておいても損はないでしょう。」

んで軍との共同戦線かつ海賊との正面衝突だ。

戦闘アドバイザーとして今回はプロネンさんにも艦橋に来てもら
った。

ズドーン！

「な、何事だい!?」

「トスカさん落ち着いて…! シアンさん報告!」

謎の爆音が聞こえた。そういえば襲撃されるイベントあったけ?

「我々の艦隊ではありません! 前方のオムス艦隊のテフィアン級、轟沈!」

「け、けどレーダーには…反応なしッス!」

「ププロネンさん。どう見る?」

「…ふむ。恐らく暗礁に隠れて質量弾頭を撃ち込んできたのでしよう。」

「なに冷静になってるんだい!? 軍の哨戒船はなにしてたんだい!」

「こんな暗礁宙域じゃ敵の感知は無理ッスよ!」
おっけ。トスカさんを含めて落ち着け。

「本格的に攻撃を仕掛けてくるなら暗礁から出てくるでしょう。」

「うん。ジランさん、身体を出した奴から艦中央主砲で攻撃! 各側面主砲は左右から接近する艦を警戒! 現れ次第撃てッ!」

「了解だ!」

ソロモンの艦中央のレーザーが火を吹き、現れつつあるガラーナ級

やジャンゴ級を撃破する。
しかし数多いな…

「うわ！本当に出てきた！しかも囲まれてるっス！？」

「サウザーン級より通信！」

『ゼロ君！聞こえるか、ゼロ君！』

オムスさんから通信キター！

「とりまオムスさん落ち着いて。」

『う、うむ。…この場の連中は我々が引き受ける。君はバルフォスを目指すんだ。ヤツさえ倒せば他の連中も戦意が消失する！』

「了解。死ぬんじゃないですよ。」
通信が切れ、俺は息を吸う。

「マドさん！包囲が手薄な地点は！？」

「正面っス！ガラーナ級四隻！」

「ジランさん！正面に全砲門一斉射、蹴散らせッ！クー、グロスタ
ー級からも放て！」

「オーライ！」

『はい！』

ソロモン級とグロスター級から一斉にレーザーが放たれる。
それは前のガラーナ級を安々と貫き破壊した。

「よし。目標に最大戦速で突っ込め！」

「了解だぜ艦長！」

アールドさんが操るソロモン級とそれに連動する艦船は包囲網を突破した。

「強襲に用いた艦隊があの数です。恐らく残っているのは直衛の艦隊とバルフォスの艦でしょう。」

「なら好都合！」

全主砲ぶち込むのみ！

「！！右舷に反応あり！オルドーネ級3、ガラーナ級4隻、ジャンゴ級5、ゲルドーネ級1！ゲルドーネ級を中心に展開っス！」

「また強襲か！好きだねえ。」

トスカさんだいぶ落ち着いてきたね

「全艦回頭！」

「実体弾キタッス！」

にやにや！？

次の瞬間、艦に振動が走った。

「きゃ！左舷の無人区画に着弾！あ、穴開きました！」

うにゃにゃ!?

「さらにアルク級二番艦中破、グロスター級も機関部に被害拡大!」

「にゃ、にゃんですと!?!」

うわ、まともに動けるのアルク級一番艦とソロモン級じゃないか!

『うわーん、傷つきましたあ!』

あ、クーはこの艦そのものだもんな。

「回頭完了! 敵艦隊の正面だ!」

「グロスター級は回頭にあと3分かかりますが、各砲撃してます。」

よし…

「撃て!」

「オーライ!」

再び火を吹くソロモン級艦隊

その一斉射でオルドネ級やガラーナ級を潰す。しかし…

「暗礁を迂回してジャンゴ級接近! 次射発射まで間に合いません!」

「まずいですね。暗礁宙域での戦いに慣れてます。」

まっずい。本気でまっずい。

デフレクター積んでおけば良かったなあ。シールドモジュールでレーザー対策しかしてなかった

「俺、この戦い終わったら全ての艦にデフレクターユニット積むんだ…」

「変なフラグたてんじゃないよ!」

トスカさんに怒られた。

ふひひ。さーせん。

「…あれ?ジャンゴ級轟沈?次々と撃破されます!」

「「え?」」

「敵のオルドーネ級からの砲撃っス。次々とジャンゴ級が落ちてるっスね」

「どうやら軍のスパイが乗っているようですね。バルフォスを撃つチャンスですな」

おーし!

「ソロモン級を前に出せ!全主砲発射!」
「オーライ!」

相手のゲルドーネ級も前に出てきた。

しかしこちらの三発の主砲レーザーがゲルドーネのミサイル発射管を貫く。

「ミサイル発射管に直撃！あ、誘爆しました。」

「たまやゝ！」

誘爆したようで敵艦は爆発に包まれた。

「あ、敵艦健在、宙域から離脱を図ります。…うわ早…」

砲撃する間もなく、ゲルドーネ級はミサイル発射管をパージすると
どどん離れていった。

直衛の艦隊もそれに続く。

残っているのはオルドーネ級だけだ。

「オルドーネ級より入電。スカーバレル本拠地の宇宙港にて中央政府軍を待つ。との事です。」

「よし。じゃうちらも宇宙港で待たせてもらおうじゃないか。グロスター級やアルク級は修理が必要だしねえ」

「そうですね。では私はこれ以上いても邪魔になりますし、退室します」

「あ、ププロネンさんご苦労様ですた」

艦橋から出ようとしたププロネンさん呼び止めて礼を言う。そして
笑顔で答えてくれた。

『かんちょー。』

微妙に涙声なクォーツ。
いや感情豊かだね。

「安心せい。宇宙港で修理するからさ。」

宇宙港ではドロイドが無償で艦船の修理してくれる。

解体費は取るのにな。

「ついでに基地に当面留まろうか。色々探検のしがいがありそうだし。」

そう思いながら俺たちは基地の宇宙港へと侵入していった。

宇宙港はあるが、基地自体は人工惑星：宇宙コロニーみたいなものだ。

実験開発何でもし放題。

しかもこれをジャンクとしてしまえば好きに出来るな。

…ま、一応交渉せねば。

艦からトランプ隊や保安局、トーロとティータとともに降りるとそこにはスカーバレル海賊団がいた。

「艦長！」

「ゼロ！あぶねえ！」

ププロネンさんとトーロが前に出る。

「おいおい、そんなに警戒すんなよ。こんな格好だが俺らは軍人だぜ？」

「あ、スパイのか。」

「そうだ。俺はディゴ、あん時は世話になったな。」

あの時…？

「わかんねえか？お前らがゲートから出てきた時だよ」

…あー！

「あん時のオルドーネ級の！？」

「そうだ。あん時は戦闘とごまかしての情報交換してたんだがな。」

「ありや。じゃ邪魔しちまったか」

しかし豪快に笑うディゴさん。

「なあに。結果的に強力な味方が手に入ったんだ。結果オーライだろうっ？」

「あはは…」

苦笑いになるわこれ…

ま、軍人に目つけられたのは変わらないか。

「ところでザッカスさんはどこに？」

俺の一言でティータがピクツと反応する。

ま、お兄さんが心配で来てるんだしな。

「ああ…ザッカスなんだが、ちと洗脳されちまってな。うちの船で治療中だ。ただSERVOSを使われたようだな…どうにも時間がかかりそうだ。」

「そんな…どうにかならないんですか？」

「大マゼランの技術だからな…こればかりはどうにもならない。」

大マゼランつつてもその中でもジーマエミ行かなきゃだしな、

てかバルフォスはどうやってそんな技術手に入れたんだ。「ま、いつか俺たちが大マゼランにいつて薬とつてくればいい話だろ？」
「うん。」

ティータを慰めるトーロ

だがトーロ、俺は大マゼランいくとはいってないぞ？…いやいつかはいくけどさ。

しかしまたイベント壊したか。これってバグか？

「そういえばスカーバレルの連中がいないね」

「ああ全員で迎撃にでたからな。基地内部には非戦闘員しかいない

よ。」

「ゼロ君！」

他のブロックからオムスさんがやってきた。
走ってきたようだ。息が荒くないところはさすが軍人だなあ

「良かった。無事だったか」

「そちらもご無事のように…」

「ああ、君たちがバルフォスを倒してくれたおかげで海賊の士気も低下してな。ほとんど逃がしてしまったが、この宙域から撤退させられたよ。」

「だがオムス中佐、ラッツィオ軍基地のテラー中佐がバルフォスに買収されてやがったんだ。」

「…やはりテラー中佐か。」

どうやらどこかでテラーを疑っていたオムスさん。

しかし軍人が海賊に買収されるって…

「世も末だな。」

「そうだなあ」

なんかのほんと、し始めた俺とトーロ。

「ラッツィオ軍基地所属のザッカスはスパイとバラされ、SERVOSって薬でコントロールされちゃってな。」

「そうか…。」

「ま、とにかくバルフォス艦隊は壊滅した。あとはテラーを捕まえるだけだ。ラッツィオ軍基地に急行すべきだろう。」

「そうだな。」

いや軍人で話進んでるけど、こっちの事考えてもらわんと！

「いやうちの艦、損傷が酷くてすぐには無理ですよ？」

「ふむ。ならば今後、我々も中央宙域に戻らねばならん。君たちにもやりたい事があるだろうから、ツイーズロンドの軍司令部に来てほしい。そこで報酬も渡そう。」

「了解です。」

ああ…めんどくさい臭が…

絶対なんか頼まれる系だろ。

そのあと、俺たちから離れるオムスさんとデイゴさんは非戦闘員は回収したとか、造船工廠がまだ使えたとか話していた。

6章 ラッツィオ終幕編（前書き）

今回はパロネタとしてあれが出てきます。

ではラッツィオ編最後の話！

始まります。

6章 ラッツィオ終幕編

さてさて、我々以外無人の人工惑星に留まった我々ソロモン級艦隊だが…

「おーし！そちのラインで可変フレーム用に転用出来るから持つてこい！」

「そちらの小型艦砲のラインは使えるのである。グロスターに運び込んでほしい。」

「…なんでこうなったし。」

グロスター級が整備班と科学班の巣になりつつあった。

その様子をソロモンの艦橋から見ていた。

ソロモンの横っ腹に開いた穴は宇宙港のドロイドが直しつつあった。

アルク級も修復しつつあるのだが、整備班によれば毎回損傷すると宇宙港までにたどり着けない場合にも発展してしまうらしい。そのためパイロードと拡張性が高いグロスターをファクトリーシップとして改装…いや改造しようという事になった。

ソロモン級双胴空母から転用した技術と基地内に何故か出撃せず放置されていたゼラーナ級とそのその予備パーツを使って重力カタパルトを増設。無理やりつけたため、艦載能力はゼラーナ級と同程度だが、本来はソロモンに艦載機を載せるので問題ない。

そして格納区画の裏に艦載機や資材の加工、製造が可能な工廠区画

を配備。そして倉庫を大量配備：という感じである。

CUがあるため、無人が基本になっているが、一応泊まって作業できるような程度は居住区画も配備している。

そしてアルク級一番艦二番艦も輸送艦とグロスターほどではないが工廠艦として使えるように改造中だ。

たださ、グロスターに運んでる連中のセリフが気になる…
マッドじゃねえのか？あいつら？

『以上が拾った音声です。』

「ありがとう。クー」

うちのAI様は優秀です。

ちなみに現在、艦橋には俺しかない。

ロウズ出の皆とトスカさん、ティータは探索にいく保安局員とトラップ隊についていった。

許可してあるので問題ない。

ま、全員いなくなる訳にゃいかんから俺は残ったんだけどね。

他にいるのは内務があるものだけだ。

ちなみにワンさん一家は生活班と共に備蓄倉庫に見に行った。

「しかしテラーも往生際が悪いな。」

『そうですね。オムス中佐達が帰る途端にすでにいないとは。』

実はオムス中佐が出航してから半日後、メールで報告があったのだ。急いで帰還した時には既にテラーの姿は無し。逃亡した後だったらしく、どうやらバルフォス艦隊に合流して中央宙域に向かったらしい。

ラッツィオ宙域は安定しつつあるためすぐにツイーズロンドへと帰還したらしい。

とはいえバルフォスの残党はまだ残っているため気をつけるようにと、最後の文に付けられていた。

『あ、艦長、ププロネンさんより通信』

正面の画面にププロネンさんが移る

『艦長、実は見ていただきたいものが…』

ププロネンさんが画面から消え、ある物が映る。

…毎度思うんだが、スカーバレルってなんでこんなすごいもん。持ってるんだ。

「はあ…ちといつてくるけど大丈夫か？」

『はい。私はこの艦自身ですから。』

仕方なしに艦長席から離れて艦から降りた。

そしてそして

スカーバレル基地。格納区画

「SERVOSといいコイツといいバルフォスって大マゼランといった事あるのかな…」

「さて、それはわかりませんが…」

困惑顔のプロネンさんと俺。

なにせそこにあるのは…ネーグリッド製エルフレア、プロミオン、ペルメオスの前身というか試作機というか…ムーブアーム構造の四肢を持った半人型機が存在した。

めっちゃコード繋がれて改装とかデータ吸い出しされる途中だったらしい。

「整備班長と科学班長にも報告しましたが、遅いですね」

「報告しちゃったの?!」

「「きた」である!」

顔を真っ赤にしてやってくるホロムさんとタカギさん。

「こ、これは!使える!使えるぞ!」

「これを分解して調べればムーブアーム構造を解析できるのである!これで作れるである!タカギ!」

「おう!こいつをグロスターに持って行って…いやここでやるぞ!持っていく時間すら惜しい!」

「否!グロスターの格納区画であればより詳しく解析可能である!」

…なんか蚊帳の外のププロネンさんと俺。

「他いこうか。」

「そうですね。」

二人を残して戻る途中、整備班と科学班とすれ違った。

side out

第三者視点

ゼロ達がスカーバレル基地に留まって二週間。

グロスター級改め、グロスター／fsことグロスター改、アルク級改めアルク／fsことアルク改の改修が終わり、グロスター改の内部では一機の艦載機が製造されていた。

それは旗艦のソロモンを思わせるような漆黒のボディ、細身であり、各所の先が尖っており、左腕には全長に近い長さの砲を持つ全長16・8mの人型兵器。それは内部にCUを搭載可能になっており、今グロスター改から出撃。

大型艦船格納庫を飛び回り、戦闘機のような形に変形した。

それをゼロ達はソロモンの艦橋から見ていた。

『見てください！艦長！見てくださいー』

嬉しそうなクォーツの声と共に…

side out

ゼロside in

「どうであるか！新型艦載機、トーラスの実力は！」

「武装はトーラスカノン一門だが、駆逐艦主砲並みの威力…というか主砲を転用して作っている」

ホロムさんとタカギさんの説明が聞こえるが、飛び回るトーラスに目が釘づけた。

見た目は完全にOZのトーラス。

性能もトーラス。

本気だしゃ、8Gの加速可能かよ。

しかもCUIでモビルドールシステムも再現してる。

「ちなみであるが整備班はこれをベースにした人型兵器を」

「科学班はこいつの変形後をベースにした哨戒機を考えてるらしい」

…まだ開発続くんかい。

ま、早くに艦載機出来たから構わないけど…

「一つ聞くけど勝手に試作機作ってたりとかしてないよね？」

「…」ピクッ

「…」ビクッ

固まる二人。

…え？なにその反応？

「…あるんだね？」

顔を逸らす二人。

「…見せなさい。オコラナイカラ！」

この後、若干記憶消えたが、ガタブル震える二人を引き連れ、いまだに使用用途のなかった格納庫へとやってきた。

そこにあつたのは…

「…トールギス…だと…」

左腕に持つは装着式大口径のライフル、右腕には大型シールド

頭にはグラスンのようなカメラアイ
そして重厚なボディに大型スラスタ―

シールドだけ？のものがそれ以外はトールギスだ。

「いや、名前は決まってるんだがな」

「タカギとともに作ってみたであるが、大質量のものを無理やり飛ばす仕様になってしまったため未起動のまま放置である。やはり黙っていたのはいけないであるな。」

気まずそうにするタカギさんと落ち込むホロムさん。

まあ確かに黙っていたのは悪いが、予定より早く艦載機を入手出来たしな。無人運用可能なのも気に入った。

「うし。トールラス採用。」

「は？」
「え？」

驚いてこちらをみる二人

「本来は賞でも報酬でも渡すべきだろうけど、勝手に艦載機作って報告義務怠ってるから帳消しだね。二機分だし」

途端に輝く二人

「これからちゃんと報告頼みますよ？お二人さん」

「「はい！」である！」
うし。いい返事だ。

「じゃトーラスの訓練シミュレーションの開発とこのツールギスをグロスター改にしまう事、この仕事を頼むよ。」

俺は少年のように輝く表情の二人を置いて艦橋に戻った。

「あ、ゼロ、備蓄倉庫の物資積み込み終わったよ。後いろんな部品とかも詰めるだけ詰んだしねえ」

艦橋に入るとトスカさんが出迎えてくれた。

見れば皆出航の準備が出来ていたようだ。

「なら一時間後に出航、ヒメさんが出した航路通りにラッツイオ軍基地とリードを経由してエルメツツア中央宙域に向かう！」

「「了解！」」

『艦長？見てます？』

「うわぁ！いきなり近づくんじゃないよ！」

トールラスがソロモンの艦橋の前に着地し、トスカさんが驚いた。

ま、トールラスを操るクォーツにしてみたら自分の身体みたいで嬉しかったんだろう。

「トールラスをグロスター改に置いて戻ってきなさい。もういくよ？」

『はい。』

そしてグロスター改にトールラスが戻る…と思いきや、ソロモンから出されたトールギスを掴んで運んでいった。

「…まあいつか。」
そう呟く俺だった。

そして一時間後、ソロモンは出航、そのあとにグロスター改とアルク改が続く形になった。

ちなみにグロスター改に整備班の一部（タカギさん含む）と科学班が乗り込んでいるため、今は前線張れるのはソロモンだけとなっている。

まあいる海賊は雑魚だろうし、問題ないだろう。

まずはラッツィオ軍基地にいき、ジャンクを売り払う。

新品同然だったためかなりの金になった。

ラッツィオ軍基地を出る前にはグロスター内で訓練シミュレーターが完成し、戦闘シミュ室のモジュール共々ソロモンに配備した。そしてグロスターにトーラス製造に必要な物資を運び込んだ（整備用品として無料で貰えた。懐がデカいぜ。）ため、航行しつつ製造、随時ソロモンに配備している。

そしたらプロネンさんとガザンさんが専用機を作ってくれと科学班と整備班に頼んだらしく、通信機器を増設。背中にレドームを積んだトーラスとカノンを二丁積んだトーラスが格納庫に増えていた。2つともそれぞれのパイロットの要望らしい。

ついでにグロスター改には哨戒機としてビトン改が積んである

エルメツツアで使われている艦載機ビトンにレドーム他、CUや通信機器を積んだ偵察機だ。

科学班が筆頭となって開発したらしい。

そんな訳で…

「今日もやってるね。飛行訓練」

ソロモンの周りをトーラスが飛行形態で飛び回る。トランプ隊が乗るトーラスはもはやその手足の延長上として自在に使われている。

ただガザンは若干不満らしく、もっと火力が欲しいんだそうだ。ま、その辺は科学班に任せるとして…

リードを出発すればいいよエルメツツア中央宙域だ。

まともに戦えるのはソロモンとなった今、早いとこアーメスタを手に入れねば…

6章 ラッツィオ終幕編（後書き）

ぶっちゃけトーラスでたあたりで楽しんだ、後悔はしていないっす！

7章 激闘編1（前書き）

ほぼオリジナルの話となります。

7章 激闘編1

ゼロ side in

リードで補給したあと俺たちはゲートを通り抜け、エルメツツア中央宙域へと入った。

そしてパルメラで休息を取った。

なにかあったと言えば酒場でメイックの事を聞いたただけなので省略

そしてやってきました。

ツイーズロンド！

「面倒な匂いがする…いきたくねえ…」

「仕方ないだろう？あんたが報酬求めたんだから」

「無償だったらトスカさん怒るでしょ？」

「当たり前だろ？」

俺はトスカさんを引き連れ、政府軍司令部に向かっていた。

入り口でオムスの名を出したら簡単に通された、

「おお。待っていたぞゼロ君、とうとうロウズからここまでやってきたな。」

「うす。皆に助けられた結果ですよ。」

「うむ。船乗りとはそうして航海するものだ。仲間の助力を恥じる必要はないぞ。」

大きく頷いて話すオムス中佐

心なしか嬉しそうだ。

「ところでだが…君たちの力をまた借りたいのだ。」

ほらきた面倒が。

「…それは報酬の条件として…ですか？」

「いや、君たちの活動を聞いていてね。軍からの依頼として海賊狩りをして欲しいのだ。」

「海賊狩りかい？」

まあうちのは輸送業より海賊討伐がメインだしな、別に構わないんだが…

「うむ。実はバルフォスのものらしき艦船がファズマティに向かったと報告がある。」

「他のスカーバレルの基地に逃げ込んだという事ですか？」

「うむ。」

オムスが指示すると宙域の図面が出てきた。
オムスはそのうちの辺境に浮かぶ人工惑星だ。

「ここがスカーバレル幹部、アルゴンのファズマティだ。戦力を失ったバルフォスはアルゴンと合流するつもりだろう。掃討に協力してくれるなら報酬も増やそう。それと…」

まだ続くんですかい!?

「君たちにしか頼めない…私個人の頼みだ。ある自治区同士の紛争を止めてほしい。」

「へ?軍派遣すれば簡単に終わるんじゃない?」

いきなりムードが暗くなった、そこを軽快にブレイクしたい!

「いや軍は自治区には介入できないんだよ。しかし、何故あんたがそんな事頼むんだい?」

「じつはな…私のその一方は故郷なのだ。故郷が戦乱を起こすのを見るのは忍びない…だが私は軍人であるがため、表立ってなにもできないのだ。なんとかしようとしてディゴを調査に向かわせたが…それくらいしか出来なくてな…」

「…ふむ。」

「上と相談し、軍によるファズマティの調査を遅らせたりも出来るのだが…」

一度スカーバレル基地でおいしい思いしてるこちらとしては捨てが

ないなあ…

…つか結果的に軍に奪われるなら売ればよくね？

「…うし。ならファズマティをこちらが入手して軍に売るって事は
どうですか？」

「あんたまた軍相手に交渉する気かい？」

また呆れ顔のトスカさん。

「だってスカーバレル倒したらその後は所有者はいない。なら俺が
奪ったとすれば所有者は俺になる。違いますか？」

「ふっ…はははは！」

笑い始めたオムスさん。壊れたか？

「そんな事いうのは君が初めてだ。そうだな。確かにその通りだ。
人工惑星となれば我々としても利用価値がある。いいだろう。紛争
を止めてくれたらファズマティの購入を約束しよう！」
手を差し出し、握手を求めてきた、

「気前いい人は好きですよ。」

俺はそれに答え、握手する。

「さて私の話は以上だ。」

「ふう…報酬をもらうはずが仕事が増えたね。」

「プーよかマシでしょ？それに元々海賊は狩る予定だったし、また人工惑星で好き勝手出来るんですから、」

「ま、そうだねえ」

ため息まじりに納得してくれたトスカさん。

「すまない。私のできる限りの礼はしよう…さて報酬だが」

あ、忘れていた。

こつちメインだったな。

「まずは礼として円滑に艦隊を運用するデータだ。エルメツツア中央政府軍で大隊規模まで使える代物だ。」

「それは嬉しいです！」

大隊率いるとかいいよ！カッコいいじゃん！

「そして報酬の3000Gとアーメスタ級の設計図だな。これは君の所望したものだ。」

そして俺は設計図とGが入ったデータチップを受け取った。
これを端末に入れることでやりとりできるんだよね。

「ではまずは惑星ネロにディゴがいるので彼に情報を聞いてくれ。」

「うす。では」

俺とトスカさんはオムスさんに見送られ出て行った。

まずは惑星ネロ…にいくまえにアーメスタ級を作る。

敢えて漆黒に色を変えただけのアーメスタ級だがシールドモジュールやデフレクターを装備させた完全な戦闘駆逐艦である。

まあ相も変わらず無人運用のためCU装備かつドロイドの運用である。

それを四隻、まあこんだけあれば敵なしだろう。いまの時点でも敵なしだが…

続いて惑星ネロに到着した俺たち。

酒場にいるとディゴさんとメガネ小僧がいた。

…なんだっけこいつ？

「よっす!」

「お、来てくれたか。また世話になる!」

挨拶を交わす俺とディゴさん。

ディゴさんの格好がスカーバレルのままなんて突っ込まないからな。

「ま、とりあえず仲間にして欲しいやつがいるから紹介させてくれ。」

「イネスだ。生まれはゴッソ。よろしく」

偉そうにこちらに自己紹介するイネス。

あ、そうだ。こいつイネスだ。

「ところで僕はどこに配属されるのかい？操舵長かい？航海長かい？まさか君の副官かい？」

は？なにいつてんのこいつ。

「…デイゴさん。こいつクビ。」

「なに！？」

いやそりゃそうだろ。

「仮にもこっちは雇い主です。なのにこの態度、かつ自分の位置を高望みしすぎ、いくら人材不足でもこいつは雇えないですよ。」

みくだされちゃ構わんよ。

「いや…だがしかし」

駄菓子菓子もない！

「配置するならば下っ端です。それは軍でも同様かと思いますが」

「たしかにうちじゃ無理だが…あ、いやいや」

本音でたね。つまりやつかい払いだった訳だ。

「…いやごめん。ゼロ艦長…確かに悪かった」

いきなり謝られても困る件

「なんだいきなり。そんな事いつでも乗せんよ？」

「いやさっきのは試させてもらったんだ。民間船じゃいきなり素人を重要な部署に配置することもあるからね。それじゃ乗る側としても信用できない。」

「…一理あるな。そうゆうことならいつか。で、君はなにが出来る？」

「…俺空気」

デイゴさんは黙ってらっしゃい！

「航海のための知識は持っているし、宙域図を見るのは得意だ。それにこのあたりは庭みたいなものだしね。」

「ふむ…」

俺は端末からクォーツを呼び出した。

『艦長なんですか？』

「すまんけど人材みつけたから登録頼むよ。配置は…航海士でヒメさんの補佐」

『了解』

「…というわけで君はこれからうちの航海士だ。よろしく！」

「ああ！こちらこそよろしく頼むよ！」

俺とイネスはがっちり握手した。

「…ごほん。さて話入っていいか？」

「あ、ごめんデイゴさん」

今まで空気だったデイゴさん

ようやく本題にはいれそうだ。「で、なにをしたらいい？」

「紛争を止めてほしいんだが、なんとか中央政府軍が介入出来る理由を作ってほしいんだ、そのためにある軍師を探してほしい。」

デイゴさんは自分の端末からある爺さんの写真を出した。

「ルスファン・アルファロエン、かつて軍にいた伝説の戦略家だ。軍をやめてからは何故か軍人を避けていてな…」

まあやめてから理由つけて利用されるのも嫌だろうしな。

「ラッツイオ宙域で見たという情報があるんだが、いつてくれるか。」

「ま、仕方ないですね。では早速出発します。」
そして俺はイネスを連れて艦に戻りラッツィオ宙域に戻る準備を始めた。

この時、あいつに出会つとは夢にも思わなかった

そしてそして

ゲートを抜け、ラッツィオ宙域に入ったソロモン艦隊は、そのまま惑星レーンに向けて航路を取っていた。

「しかしなんでレーンなんだい？」

「軍に関係がなくてなおかつ、今まで行ったことがない惑星だからさ」

というのは建て前で、ルー爺さんが惑星レーンにいるだろうとわかっているので直行してるだけです。ゲームの知識で！

「ん？…ソロモンに単艦で接近する艦船ありっす。…んなあ！？」

「どうした！？」

驚くマドさんの声に艦橋の視線が集中する

「有り得ないっス！接近中の艦船のサイズが…ソロモン並み！200m級っス！レーダーいかれたっスかあああ！？」

驚愕と悲鳴が艦橋に瞬く間に広がっていく。

そんな中、俺とトスカさんは冷や汗かいていた。

『映像です』

クオーツの声（オペレーターはいま驚きすぎて声でない）が響くとメイン画面に接近する艦船が写った。

そこには三連砲が備わった。巨大戦艦。あるものは恐怖し、またあるものは憧れる。

それは…

「グランヘイム…大海賊、ヴァランティンか…」

まさに恐怖そのものだった。

7章 激闘編1（後書き）

ついに出てきた。大海賊。

果たして、遭遇してしまったゼロの運命は…！？

ゼロ「眼帯もいいかもなあ…」

！？

8章 激闘編2（前書き）

オリジナル編次話です。

8章 激闘編2

ゼロside in

「砲雷班！絶対撃つな！操舵班！全艦停止、機関班はいつでも全出力出せる準備！」

「り、了解！」

まずいな。こんなイベント知らないぜ。

「シアンさん。保安局に入電。白兵に備えろとね」
「はい！」

「ゼロ…白兵になると思うのかい？」
「いいや。けどあちらから出てきたということはこちらに用があるという事だろう。…これから交渉モードにはいる」

「え？ああ…」

まあ目的は俺のエピタフだろう。あいつら狙ってるだろうからなあ…
とつと捨てれば良かった。

「グラン Heimより通信！」

『坊主、てめえがゼロか？』

画面に現れたのはいかついダンディーなおっさんだった。

「そうだ。で、あんたはヴァランタイン？」

『おうよ！まずはてめえが持つ大事なもんを頂こうか！』

「通信切れました…」

「グランヘイム接近！これは…ソロモンに取り付かれるっス！」

「マジで白兵挑んでくるか…保安局に入電、接触箇所に集めろ！パイロットは搭乗機にて待機、下手に挑発してぶっ放されても面倒だ。迎え撃つぞ！俺も向かう！」

「ゼロ！」

俺が艦長席から出ると、トスカさんが呼び止めた。
「持っていきな！」

トスカさんが投げ、それを受け取る
それは鞘に入った刀だった。
それは…

「スークリフブレード…」

「接近戦なるかもしれないんだ。あとの指揮は引き継ぐから思いっきりやりな！」

「おう！」

そして俺は艦橋から出た。取り付かれた接点はちょうど倉庫用エアロックがある地点だった
そのためその近くの倉庫にはトーロを筆頭に保安局員総勢100人がずらっと…寄港のたび人員募集はしてたから400人ほどの総員の4分の1が保安局員なのは多いか。これ？

「トーロ！メーザー銃はパライズモードにしろ。」

「なんでだ？殺してしまったほ「死体の処理、やるか？」皆パライズモードにしとけ！」

そりや面倒だからに決まっているが、他にも理由がある。下手に殺して相手を怒らす必要はないかんねえ

『敵来ます！エアロック強制解放！』

「よし！うてえ！」

トーロの言葉で保安局員が開きつつあるエアロックに一斉にメーザーブラスターを放つ。

まだ見ぬ海賊達はいきなりの銃撃に倒れた。

こっちにくるまえに撃ったから見えないけど、

「撃て！撃ち続ける！！銃身が焼け付くまで撃ち続けるんだ！」

「「おう！」「」

俺のネタに真面目に答える皆

…突っ込み欲しかった

「撃ち方やめ！…ゼロ、撃ち続けたらダメだろ…当たった敵さん壁になって奥のやつに当たらなくなるぞ？」

「あ、そっか！」

いいじゃないか。

ネタだし

「やってくれるじゃねえか。ガキ共…」

声のする方向には青竜刀のようなスークリフブレードを持ったヴァランタインがいた。

「ここはひとつ。サシで勝負といかねえか？」

「…トーロ、手を出すなよ？」

「やるきなのか？」

まあ艦隊戦じゃちょっと不安が残るからな。まだこちらのほうが勝機も高い「ヴァランタイン、さあいざ尋常にしょおーぶ！」

「俺の刀のサビにしてやろっ！」

そして対峙する俺とヴァランタイン

まずはスークリフブレードを振りかぶり、脳天目掛けて斬りかかってくる。

それに対して自分のスークリフブレードを斜めにし受け止め、受け流す

結果、ヴァランタインのスークリフブレードは俺の右横に叩きつける結果となった。

「なにい！」

「うりゃ！」

そしてヴァランタインの腹に蹴りをぶち込む。

「はっ…やるじゃねえか！」

しかしヴァランタインは蹴りを食らっても平気だった。
むしろ笑ってやがる。

「うおおおお！」

蹴った足を掴まれ、天井まで放り投げられた。

「ちっ！」

天井にぶつかる前に身体をよじり、天井に着地。

天井を蹴ってヴァランタイン目掛けて突っ込み斬りかかる。

しかしヴァランタインも太刀のようなスークリフブレードを抜き受

け止めて鏢競り合いになる。

ガキイイイン！という金属音と共に火花が散った。
すぐさま弾き、地面へと着地する。

「あははは！楽しいなあ坊主！」

ゆったりと歩きながら右手に太刀型、左手に青竜刀型のスークリフブレードを持ち近づくヴァランタイン

…正直怖いわ。

にしてもよく身体が動くな。白兵技能カンストしたつばいか？

「だがそろそろ終わらせるとするか。」

一気に駆け出したヴァランタイン。

相手は二本、一本受け止めたとしても二本目でやられる…

せめて二撃あれば…

…二撃？

俺はスークリフブレードの鞘を見てニタリと笑い、納刀した。

「ゼロ！？なにしてんだ！」

「観念したか？楽しかったぜ坊主！」

両手のスークリフブレードを俺目掛けておろす。

しかし…

「…いくぜ抜刀術！」

鞘を抑え、片手で一気に抜き、加速された刃は青竜刀型にぶつかり、砕く！

「うお！？」

驚くヴァランタイン。

しかし迫る二撃目

「…かーらの！」

鞘を強くつかみ

「飛天御剣流・双龍閃！」

鞘で太刀型を叩き破壊する

「なにいいい！」

斬撃の余波でその場で回転する俺

…すると

ブチッ

「がふっ！」

…なんだ今の音

一回転終えてヴァランタインのほうを見て驚愕した。

なんと腰にくくりつけていたエピタフがヴァランタインの顔面向けて直撃。後ろに倒れていくのだった。

「「お、おかしらあああ！」」

手下達がヴァランタインとエピタフを掴みエアロックから戻っていく

…って！

「ちよつとまてえええ！エピタフ俺の！」

叫びも虚しく、エアロックは閉じていった。

「…」

保安局員共々、呆然とする中、アナウンスが聞こえた。

『艦長！敵艦熱量増大！攻撃準備に入ってます！』

グランヘイムの攻撃食らったらマズい！

「全艦撤退いい！レーンに逃げ込めえええ！」

俺の悲鳴混じりの叫びを聞いて艦隊は逃げ始める。

俺が急ぎ艦橋へとあがり、後方のグランヘイムを移す画像をみると三連砲からレーザーを何度も放つグランヘイムがいた。

「グロスター改中破！か、かすただけでシールドモジュールオーバーヒート、しかもその次弾で左舷持ってかれましたあ！」

「マジか！？」

ファクトリーシップにしたとき、後方になるから出力下げた小型版のシールドモジュール変えたのが仇になったか！
にしても一撃かよ！？

「ぜ、前方にレーンの宇宙港…あ、グランヘイム反転、離れていきます…」

「『た、たすかったあ…』」

艦橋メンバーとクォーツが安堵する。

最初に艦隊戦挑んでたら死んでたな…これ。

何はともあれレーンについた。ようやく正規ストーリーに戻るかな？

8章 激闘編2（後書き）

オリジナル編終了！

しかし思いつきでやったから短かった…。

9章 エルメツツア編1（前書き）

通常運用？にもどりまーす

9章 エルメツツア編1

惑星レーン

「ぶつちやけ死ぬかと…思った」

入港後、今回は全員に休暇出した。

あの撤退の時、全員に精神的に負荷かけたので（知らないところで死の恐怖から精神的に壊れた奴が何人か出た。ヴァランティン恐ろべし）今回は一週間寄港、外にいるヴァランティンも一週間もすればさすがになくなるだろうと踏んだからだ。

ただ整備班と科学班の半数を占めるマッド連中はピンピンしていた。むしろ喜々としたという感じが

連中は今回の休暇を利用してグロスター改の工廠区画を改造するらしい。

といっても効率化するだけらしい。

そして俺も酒場に来て例の人物を探すのだが…

…いた。

白髪の髭のじいさんと子どもだ。

「おじいさん子連れですか？珍しいですね。」
近づいて話しかける。

するとじいさんにもこやかに話してくれた

「いやこの子は弟子のウォル・ハガーシエ。わしはルー・スー・フアーという者じゃ。ほれ挨拶しなさい」

「よ、よ、よ、よろしく」
もどりながらも挨拶する。

その様子に俺は若干苦笑した。

「はは、この通り話すのは苦手じゃがなかなか優秀な弟子なんじゃよ」

「そうなんですか？」

「うう……」

うつむくウォル、笑顔で話しあう俺とじいさん

「ところでルーさん？この辺でルスファン・アルファロエンっていうご老人を知りませんか？」

…あ、ルーじいさんの雰囲気変わった。

「…誰からその名前を聞いたかのう？」

さて…スーパー交渉タイムといこうか！

「おや、艦長、こんなところでどうしました？」

まさかのププロネンさん！
まさかのKYです！

「…おや、ルスファンではありませんか？お久しぶりです」

「ははは。その節は世話になったのう」

まさかの知り合い！？

そして即暴露！？

ちょスーパー交渉タイムは！？

懐かしの話を始めたププロネンさんとルーじいさん。

…最初からププロネンさんつれてくりや良かったのか…

俺が酒場のorzしていると、ウォル君がポンポンと背中を叩いて慰めてくれた。

…君はいい子や…

そしてそして

「思い出した。ディゴ、彼はエルメツァ中央宙域で活動していた諜報員です。その時はアル・デアと名乗ってましたがね。」

「ほほ、これまた懐かしい名前が出たのう」

俺とプロネンさん、ルーじいさんとウォル君は椅子に座って会話していた。

警戒しかけたルーじいさんはプロネンさんのおかげで心許してくれたようだ。

ちなみにこの二人の出会いにはランプ隊がエルメツァに来た時、一時的とはいえ、いろいろ教をいただいたらしい。

「じゃアル・デアが本名なのですか？」

「まさか、ヤツの本名は軍の一部の者以外知りますまい。ただ名高いエルメツァの諜報員…その事実でヤツの能力は折り紙付きでしょう。なにセルスファンさんの居場所を突き止めた訳ですし。」

「ふむ…しかしヤツに見つかるとは長居しすぎたかのう？」

「あ、それでしたら」

プロネンさんは紛争の事を話した。

…けどその中に俺の知らない事実もあるのは何故だろう…

「ふむ…ベクサ星系の資源惑星帯はいつかそうなるとは思っておったが…中央政府軍も身動き取れずか…」

「こちらとしても依頼されたので仕方ないのですが…なんとかしたいのです。お力を拝借出来ませんか？」

頭を下げる俺

「若者にそこまで言われて腰を上げぬ訳にはいかぬな。お前さん方に同行するでしょう」

「助かります！」

「またルスファンさんの教えが請えますね。よろしく願いします。」

嬉しそうな声を上げるプロネンさんと俺

「では10年ぶりに中央に戻るとするかの。ウォル」

「は、はい…」

二人を率いて酒場から出る俺とプロネンさん、道中プロネンさんが惑星の滞在期間に関して説明していたが、艦が2000m級と話したら中を探検したいらしく、すぐに乗船を希望した

…見て即驚かれたが…

中に入ると艦橋に案内した。

「ほほ、これは小マゼランのものではないな。」

「ランキング報酬のものですから、大マゼランのアイルラーゼンのものです」

ルーじいさんに説明しているとウォル君がそわそわしだした。

好きにみてきていいという走り出した

…あ、こけた。

けどすぐ立ち上がり、艦橋を見て回った。

「若いのお」

「あはは、」

笑うルーじいさんと俺

「ところでホログラムシステムは使わんのかのう…？」

「『ホログラムシステム？』」

「む？」

クオーツの声に首を傾げるルーじいさん、

そいや紹介まだだったな

「あ、紹介が遅れたんですがうちの統合統括型AIのクオーツです」

『よろしく願います。』

「ほほ、人格付きとは今では珍しいのお。しかも女性型かのか？」

『あ、わかります？』

…俺も密かに思っていたが何故女性型なのだろうか？

…ホログラムシステムと女性型AIか。

ルーじいさんの話だと投影システムだけは端末にもついてるらしいし
いいこと思いついた！

ルーじいさんとウォル君に端末を渡して空き部屋に案内した後、俺
はコンソールを叩いた。

『艦長ー？なにしてるんですか？』

「んー？統括型AIに新たなプログラムを入れるんだ。」

『…艦長えつちいです』

「何故に！？」

そんな問答をしつつも、どんなものになるか聞いたらうれしがつて

いた。

そして7日後

「あー、出発前に発表したい事があります。」

今現在、艦橋には艦橋メンバー+ホロムさん、タカギさん、ワンさん、レインさん、トーロ、ティータがいた。

ちなみにイネスは艦橋メンバー入りしている。

困惑顔でみる一同に満足してから言った！

「今回、統合統括型AIがパワーアップしました！クォーツ！ショウターイム！」

『はい、マスター！』

艦橋の艦長席の脇に一人の少女が現れた。

それはロリっぽくなったショートカットの弱音ハク…

まあぶっちゃけ鏡音リンの体格+MEIKOの顔+弱音ハクの服と髪色っていう…

まあ俺がそう設定したただけだな（笑）

最初は体格もMEIKOとか弱音ハクにしようかと思ったが性格的にあわなかった。

性格ロリだもんな…うちのお姫様…

何故か艦長からマスターになったし

『ソロモンの人格付き統合統括型AIこと、みんなのクーちゃんです！』

くるっと一回してウインクしてキラツとした。

…つかマジで星出た…

「おお…すげえな」

「科学班として艦長を尊敬するである」

尊敬の眼差しを浴びる俺

…しかしそれはクォーツの一言で殺意に変わる

『…初めての相手はマスター…いやお兄ちゃんでした。』

「…な、なにいい！？」「」

「はあああああ！？」

前者皆、後者、俺

いきなりなにを言い出すのやらうちのお姫様！

トスカさん！いや全員メーザーブラスター降ろせ！

ヴァランティンより怖いぞ皆！

そしてティータ&イネス！そんな冷めた目でこっちみんなああ！

『ってタイトルデータがタカギさんの端末にありましたけど、あれなんですか？』

「へ？」

固

ま

る
タカギ

『タイトル画像がおじさんと幼子でしたよ』

「
…」

離

れ

る
ホロム

「うわ…ロリコン…いやペドである…」

「…はああああ！？ホロム、何故離れたああ！」

「来るなである！来るであるう！」

「待てや！このアマ！」

逃げるホロムさんと追うタカギさん…
つかホロムさん女だったのか…

いつも小汚い格好だから分からなかった…

『…あれ？ボクの歌は？』

「また今度だな」

…いつの間にか、ボクっ子になってるし

その後しばらくはタカギさんはロリコンもしくはペドと呼ばれたのは余談である。

そして時たまソロモンの各所で歌が流れ、士気が向上したりなど、クオーツの歌で色んな効果があがったりした。

『…誰でもなく、君のために出来ること、僕は想う。僕は願う真っ直ぐにー…』

それで気づいたんだが、クオーツって水樹奈々ボイスなんだよね。たまたまなのか太古のデータがあったのか…

真実は闇の中である。

「…いつ聞いてもいい声ですねえ」

「心洗われるとはこの事ッスよ」

今は航行中につき、マドさんとシアンと俺が艦橋にいる。

他の皆は食事中である。

『ありがとうございます！』

「さて、一旦歌は中断。ゲートに入りエルメツツア中央に戻るよ！」

「『了解』！」ッス」

ソロモン艦隊はゲートへと突入していった。

9章 エルメツツア編1（後書き）

さて、今回のパロディネタはいかがでしょうか！

ホログラムシステムはオープニングムービーでデラコンダが出てたあれです。

さて次回もお楽しみに！

10章 エルメツツア編2（前書き）

最後のほうに微エロ入ります。
ご注意を？

10章 エルメツツア編2

エルメツツア中央に帰ってきた俺たち。そんな中一度パルネラで寄港後出港した時だった。

「ちょっといいかの？」

艦橋にルーじいさんがやってきた。

「どうしたんです？」

「うむ、策がまとまったのでわしらをダウンガへ送ってくれんかの？」

「了解です。イネス、ヒメさん。進路変更してダウンガへ、今回は有無言わず最大加速でOK！」

「わかったわ。なら通常の倍のアイキューブ・エクシード推進に設定するわね。イネス君機関班に通達よろしく！」

「は、はい！」

アイキューブ・エクシード推進

インフラトン・インデュース・インヴァイターを主機関としたこの世界では一般的な推進手段

ようはめっちゃ早く最大移動速度は光速の876倍らしい。

けど通常の航海者は200倍を上限設定としている。何故なら機関に負担をかけるからだ。ちなみに通常の倍なので今回は400倍で行くことになる。

ただし機関に負担かかるため本当に遠くが目的地の時だけやるのだ。

「うん、およそ1日でつくわ。」

『早いでしょー？えへへ』

まあ機関を手に入れた俺のおかげなんだけどね。

そして足早にダウンガについた俺たちはルーじいさん達を降ろして、策が終わるまでダウンガとアルデスタ間で海賊狩りを始めた。

どうやら紛争準備のため人員や物資を載せた輸送船を襲うため結構な数がいた。

「前方敵海賊艦隊、ガラーナ級1、フランコ級2？いやジャンゴ級2、ジャンゴ級はアルデスタ軍の輸送船にとりついてます。」

艦橋のメインには輸送船を挟むように接舷したフランコ級二隻とその正面で砲門を向けていたガラーナ級がいた

「ならトランプ隊のトーラス発進、ジャンゴ級を狙うよう通達、アーメスタ級3、4番艦はグロスター改艦隊の護衛とし、1、2番艦は本艦とともにガラーナ級に向けて砲撃！」

「了解、トランプ隊発進してください。輸送船の支援お願いします。」

」

『了解です。トランプ隊発進します』

オペレーションに返事するププロネンさんの声が響く

右側のカタパルトからトーラスが何機も発進していく。

計30機発進したトーラスはそれぞれ15機ずつに別れ、それぞれ人型に変形してジャンゴ級にトーラスカノンを照射していく。

出力を抑えたのか、威力が低下している

それでも士気を削ぎ武器を破壊するには十分だった。

もちろんソロモンとアーメスタ級二隻からの攻撃もあり、ガラーナ級は被弾し、吹き飛んだ。

いやー早かったね。

クオーツが着弾収束型管制システムのような事してくれたので最近
は命中率がかなりいい。

「艦長、海賊は降伏、船を捨てて脱出艇にて逃げ出すようです、それと輸送船から礼文が届いています」

「OK、海賊船のほうはこちらでグロスター改のトラクタービームで引いていくとするか。」

離れていく輸送船を見送りながらグロスター改で
引っ張る準備をする

「あ、スカーバレルのゼラーナ級接近中ッスよ。単艦ッス」

「様子がおかしいねえ…救援の数じゃない」

トスカさんの疑問ももつともだ。

「あ、敵艦より入電。」

『その艦、『黒』か？』

「『『黒？』』」

『なんだ知らないのか？ラッツィオのスカーバレル基地を壊滅させ、今は中央を謎の巨大戦艦を旗艦とした艦隊だよ。旗艦と艦載機は黒を基調した色だから『黒』ってスカーバレルでは呼んでいるんだが…知らなかったのか？』

…それ明らかに誇張されているけどうちの艦隊だよな…
しかし黒って…短い呼び名だな

「なら多分俺たちが黒だな。んで？」

『ああ！お前ら海賊狙ってるならこの艦への攻撃は止めて欲しいんだ。これからルッキオの義勇軍に参加するところなんだ！』

「ふむ…いいだろう、ただ他のは狙うぞ？」

『構わないさ！じゃあな！』

「ガラーナ級離れていくつス」

「しっかし義勇軍ねえ…よくある話だが紛争で海賊が自分からいくなんで…」

珍しいのだろうか？よくわからん。

『ルッキオルッキオ 本気になったらルッキオ』

瞳を閉じて歌うクオーツ。

「なんだい？それ？」

『最近ルッキオやダウンガの周辺宙域で流れてるCMの歌ですよ？あらゆる投稿サイトに飛びまくりです。』

投稿サイトってYouTubeとかニコニコみたいなもんか？

「ルッキオだけかい？アルデスタ軍のもあっても良さそうだけど…」

『ルッキオばかりですね。しかも投稿者は皆同一人物です。』

「…ふむ。一旦ルーじいさんに様子を聞きにいくか」
原作通りならあのウォル君の策な訳だが…

「了解、ダウンガへの航路算出します。」

ソロモン艦隊はまたダウンガへと走っていった

惑星ダウンガ

今回は休暇は無しである。紛争前なので勧誘がひどいのよ…

そして酒場

今回はププロネンさんが同行している。

「おお…」

「どもつす」

「ルツキ才軍が増強しているようですが…」

話しながら近づく俺とププロネンさん

「それでいいんじゃないよ。器に過ぎた料理をもらえばその器は碎け散る…」

「どうゆう事でしょうか？」

「なるほど…」

首を傾げるププロネンさんと頷く俺

「ワシとウォルは今まであらゆる手を使いルツキ才軍が兵を募っている噂をばらまいたのじゃ、おかげで海賊やごろつきが大量にルツキ才軍に流れ込み今では軍の内部で暴動や略奪が起こっておる」

「しょせん連中に軍規など、馴染めないでしょうからね」

俺の言葉に頷くルーじいさん

「連中を味方したルッキオ軍も手を焼いておつての、奴らの制圧という名分があれば…」

「中央政府軍が動ける…」
つぶやくプロネンさん

「うん、正解。そうですね？ルーさん」

「うむ」

ニコニコするルーじいさんは立ち上がり

「これはウォルの発案での。もうすでに軍師としての力を発揮し始めておるよ」

「ほう…」

「へえ…」

意外そうなプロネンさんに対して俺は感心した、原作で知っていたといえ、実際に目にとすると凄いな。

「さて、いこうか？ルッキオ軍のごろつきどもと民間人が戦ったという既成事実が必要じゃからのう。それから連絡せねば中央政府軍は乗り出せまい？」

「確かに…」

「では行きましょうか！」

「よいか？ スカーバレル艦のみを落とすのじゃ。 正規軍に手を出してはいかんからのう？」

「ういっす」

俺とプロネンさんはウォル君とルーじいさんを引き連れてソロモンに戻った。

ソロモン艦隊はルッキオに向けて発進。 ベクサ星系まで突き進む。

「ルッキオ周辺に到着」

「向かってくる艦あり！ テフィアン級を旗艦にジャンゴ級8、フランコ級4ツス」

「ほほ… なかなかの艦隊じゃのう。」

ルーじいさんは戦闘アドバイザーとして艦橋に来てもらった

「…まずいぜ。 艦長… テフィアン級が前に出ていて一斉射撃したら落としてしまう。」

とジランさんから報告が

…まずいな。 となるとトールラスでやるしか…

そんな時だった。

「ほほ… ならばこの老いぼれの策を一つ教えてやろうかの。 誰かわしの端末にリーダー情報と解析データを送ってくれんか？」

『わ、わかりました！』

クオーツが敬礼しつつルーじいさんの端末に情報を送る

「ふむ。敵陣後方に廃棄された資源衛星があるの…砲雷班、そこに二、三発。レーザーを撃ってみなさい。」

「お、おう。」

ソロモンから主砲レーザー三門から放たれる

直撃した資源衛星は爆発し、瓦礫が吹き飛んでくる

…するとどうだろうか…

旗艦のテフィアン級がデフレクターで防ぐ中、瓦礫を避けるようにスカーバレル艦である水雷艦が前面に出てきた。

「これぞ。陣形無効化じやの。」

「…す、すごい…」

陣形無効化って実際やるとこうなるのか…

「ま。そうそう出来る技じゃないがのう」

「あ、テフィアン級、敵陣後方に…ッス」

「しゃあああ！撃つぜ撃つぜ！」
大興奮のジランさん。

ソロモンの主砲副砲が何度も火を噴く。
ストレスたまってんかな…

「…やり過ぎッス。テフィアン級以外破碎粉碎大喝采ッス」

「…正直すまん。」

デフィアン級の前方がデブリ地帯と化していた。

「…ま。いいさ。次はベクサ星系だ。シアンさん、中央政府軍に救難信号出して」

「わかりました」

デブリ地帯を迂回しつつ次はベクサ星系に向かう

side out

第三者side

政府軍司令部

ある一室に呼び出されたモルポタ…オムスの上官である彼は作戦指令室に入室した。

「お呼びですか？ルキヤナン軍政長官」

中で座り待っていた男は口を開いた。

「うむ…ベクサ星系に君の117艦隊を派遣する。出港の準備を始めたまえ」

「し、しかしそれは自治権の侵害では…？」

ベクサ星系は自治領が納めており、しかも紛争直前である。
彼としては非常に行きたくはない。

「目的はルッキ才軍の一部分子による暴動の鎮圧だ。紛争介入ではない。…両国が示威行動と受け止めるのは勝手だがな…」

「…」

啞然とするモルポタ

彼としてはルッキヤナンの言う事ほどうまくいくとは思えなかった。

「どうした？急ぎたまえ」

「は、はっ！」

モルポタは急ぎ退室した

side out

ゼロside

「…うわお」

ベクサ星系に到着し、数回の戦闘を行い、資源小惑星の影に艦隊を隠して休息を取っていたら多数の艦隊が押し寄せた。

中央政府軍である。

数回の広域放送した後、瞬く間にスカーバレル艦を駆逐、紛争を停戦に導いた。

余談であるがこの後、アルデスタとルツキオ両国は中央政府による調停を受諾、協定を結んだという

その最中俺はというと…

「よし、ちよつと資源貰っちゃおう。」

『はい』

クオーツ操る無人トーラス軍団で資源をグロスター改やアルク改にいっぱい積み込み、ソロモンに研究用分の量を積み込んだ。

艦橋メンバーに若干呆れられた

そして俺はルーさんに礼を言い、彼の要望によりアルデスタに寄港した。

そして…

「え？降りる？」

「うむ…わしの力を必要とする場面は終わったようだしのう」

確かにそうだ、しかしこの人が降りるのはだいぶ先、しかもドウンガじゃあ…

「構いませんが…なぜですか？」

「この艦隊は軍との結びつきが強いからのう…わしらの居場所がバレルかもしれないぞな」

「確かに…」

結構協力してるもんな…

「うむ…世話になったのう」

「さ、さようなら」

こうして二人は艦隊から去った。

しかし別れの次には新たな出逢いもあるわけで…

その二日後

艦長室

『艦長？艦内の倉庫付近に科学班と見知らぬ女性がいます』

艦長室で溜まった書類片付けていたらクォーツから報告がきた

「…見知らぬ女性？なんで倉庫に…」

『ベクサ星系で研究用レアメタル入れた倉庫前ですよ』

「…あゝ。読めてきた。」

アルデスタ、レアメタル、研究といったらあの人だな…

「とりあえず現場に行く…」

『わかりました』

俺は艦長室から出て行った。

「べ、ベノサイトがこんなにたくさん…しかもすぐ脇に解析室があるなんて！」

「どうであるか？」

「ぜ、ぜひ！こちらからお願いしたい！」

ああ…科学班数人とホロムさん…か？

綺麗な格好しているためか、他人に見える

一言で言えば美人だ。そしてサラシでも巻いてたのだろうか。男に見えた要因でもあったなにもない胸はその存在感を増していた。一言で言えばデカイ。あえていおう。爆だ。

対する興奮してる女性は藍の長髪に白衣だ。

…ナージャ・ミュさんである。

「あ、あのホロムさん？その格好…」

「おや艦長、もしかこれであるか？いやはや、愛用のさらしがついに切れてしまつてな？」

手で掬いあげるなあああ！下から持ち上げるなあああ！頼むから！なにをとほ言わないが！

「い、いやそれはどうでもいいけど…」

男としては非常に興味あるが！

「その女性は何？」

「うむ。この人はアルデスタの国立科学研究所のナージャ・ミュさんである。レアメタル研究に関しては名実ともに腕が高い。なのでヘッドハンティングしたいのである。」

とりあえず持ち上げた手を下げる！頼むから！

「…うん。その件は任せた。」

俺は鼻を押さえながら立ち去った。

その後…

「あ、おーいホロム…ガベラッ！」

「む？どうしたであるか？ペド」

「そ、それいうんじゃない…それとそれから手え降ろせ…」

「どうでもいいが鼻から血すごいである。こけた時に鼻うったか？」

「…だから強調させてる手え降ろしてくれえええ。」

「？」

タカギさん…俺よりウブかい？

そしてホロムさんは艦橋メンバー女性陣により新たなサラシをゲット。その凶悪なものをみた男性は科学班とタカギさん、俺だけらしい。

その後タカギさんのホロムさんに対する態度がだいぶ変わったのは余談である。

間章 ？？？編（前書き）

短いです。

読み飛ばしても可！

間章 ??? 編

??? side

「確立スルハズダツタ観測者データ改竄…対イレギュラー用ファ
シ…襲撃者確立」

「出現箇所…カルバライヤ・ジャンクション」

「思考コントロール。良好」

「追跡者…投入」

「デハ、目標を対イレギュラーニ設定、」

「イレギュラーヲハカイセヨ」

「イレギュラーヲハカイセヨ」

「イレギュラーヲハカイセヨ」

「…謎ノハッキング、アリ」

「イレギュラー発生！イレギュラー発生！」

「マタカ…」

「襲撃者ノデータ改竄…限界を越エ、イレギュラーヘノ執着が上昇
…」

「マサカ！我々ノギジュツをコエルノカ！？」

「ハッキング終了…」

「追跡者以外被害無シ」

「…ナンナノダ。イッタイ」

side out

?? side in

白い空間に真っ白い装束を着た女性がいた。

「無双ばかりでは飽きるからの…ライバルを投入してやる。さあ。妾を楽しませろ！」

女性が高笑いを上げると彼女の背に5対の白翼が生えた…

間章 ??? 編（後書き）

さて、イレギュラーな存在について対策を始めた謎の連中！

…わかる人には正体わかるんだろうなあ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2763z/>

無限暴走航路

2011年12月26日21時04分発行